

社会的変容からみる飲酒環境への  
提言

~ 本来の宴の姿の再認識 ~

A proposal for drinking  
environment considered from  
social transformations

~Recognizing anew the form of an  
original party~

1 . 論文タイトル : 社会的変容からみる飲酒環境への提言～本来の宴の姿の再認識～

2 . 論文タイトル ( 英語 ) : A proposal for drinking environment considered from social transformations~Recognizing anew the form of an original party~

3 . キーワード : 酒離れ、宴会、一次会、二次会、コミュニケーション、人間関係

#### 4 . 論文要旨

社会生活を送る上で避けては通れないもの、それが飲み会である。

飲酒が出来る年齢になると、我々は様々なコミュニティーにおいて数多くの飲み会を経験することとなる。この飲み会には主に一次会と二次会の二つの形式があり、そのそれぞれにおいて各参加者の立ち居振る舞いや心持ちには様々な差が存在することを、我々は日々身を以て体験してきている筈である。

既知のとおり、殆どの場合において二次会は席次を崩したり無礼講な部分が垣間見えたりと、一次会に比べてより人と人との距離を物理的にも心理的にも近付けさせるものであると考えられている。このような飲み会においては、人々は実り多いコミュニケーションを取ることが可能であり、同時に酒を飲むということ自体をより楽しむことができると言えるであろう。

しかしながら現代の日本では酒離れの進行が叫ばれ、飲み会というものの自体の求心力も非常に低下していると考えられる。これは、会社や学校といった、我々が日常生活を送る場において様々なハラスメントの増加が近年度々問題となっているという事実が、飲酒環境においても暗い影を落としていることを表していると言えるのである。

本稿では、人々の参加意欲を高め、更に参加することでよりよい人間関係の構築に近付くことが出来る飲み会とはどのようなものであり、そうしたコミュニケーションの潤滑剤としての飲み会の場を身近にしていくためには何が重要であるのか、ということについて論じていく。

第一章では、国内における酒離れの現状について酒類の来歴を踏まえながら述べつつ、同時に近年特に若者の間で増加しつつある様々な〇〇離れについても言及する。続いて、第二章では酒離れの要因を日本人の内面的・外面的変化をもとに考察する。第三章では、宴会の構造を再確認しつつ、酒離れという問題を改善するための対

策として、前章を踏まえて新たな飲酒環境の提言を行う。

## 【目次】

### 第1章 日本人の酒離れ

#### 第1節 酒離れの現状

#### 第2節 若者の〇〇離れの増加

### 第2章 酒離れの要因

#### 第1節 飲酒環境における悪循環

#### 第2節 ハラスメントの増加と現代人の内面変化

### 第3章 新たな飲酒環境の提言

#### 第1節 宴会の二重構造

#### 第2節 宴会に対する意識調査

#### 第3節 一次会的飲み会のメリットとデメリット

### 第4章 総括

### 参考文献・データ出典

## 第1章 日本人の酒離れ

### 第1節 酒離れの現状

エチルアルコール<sup>1</sup>を含む致酔飲料である酒類は古来、世界各地でそれぞれの原料を使って製造され、多くの種類がある。その起源は今から 6000 年以上前の新石器時代後期に、メソポタミア地方にまで遡る。紀元前 3000 年頃にはエジプトでワインが作られ、紀元前 5000 年にはメソポタミア地方でビールが作られていた。日本国内では、奈良時代には麴を使った日本酒の作り方が確立されていた。国税庁の酒レポート<sup>2</sup>によると酒類は、「百薬の長」<sup>3</sup>と言われているほか、その国の食文化とも関わりの深い伝統性を有した代表的な嗜好品の一つであり、アルコール飲料であるため致酔性、習慣性を有するなど、社会的に配慮を要する財としての物資でもある。さらに、生活必需品ではなく、嗜好や経済力に応じて消費される奢侈品であるため、その背後にある担税力に着目して酒税が課される担税物資でもある。このように酒類は人間が酔うという目的だけの為に存在しているのではなく社会的、経済的にも重要な役割を果たしている。

しかしながら、今日の日本では酒離れ<sup>4</sup>の進行が著しい。国内市場では、平成に入って、人口が 2008 年の 12,808 万人をピークに減少傾向にあり ( 図 1 参照 )、成人人口における 60 歳以上の割合は 23.2% から 39.6% に増加するなど ( 図 2 参照 )、人口減少と高齢化は酒離れの大きな要因となっている。また、平成に入ってから成人人口は一定の増加の後ほぼ横ばいとなっているのに対して、成人 1 人当たりの酒類消費数量は減少傾向にあることから、酒離れの傾向は数値的にも見ても明らかである ( 図 3 参照 )。

また我々は宴会についてのアンケートを実施した。調査期間は 2015 年 9 月 5 日~9 月 14 日までの 10 日間。調査対象は 20 歳以上の男女とし、街頭アンケートおよびスノーボール型の拡散などを活用して行った。10 日間で男性 104 人、女性 90 人の合計 194 人から回答を得ることができた。

そのなかで飲酒習慣者の割合についても調査した。ここでの飲酒習慣とは、厚生労働省の国民・健康栄養調査における飲酒習慣の定義に基づき、週に 3 日以上で、清酒に換算し

<sup>1</sup> 示性式  $C_2H_5OH$ 、又は、 $CH_3CH_2OH$  で表されるアルコールの一つ、エタノールの別名。

<sup>2</sup> 国税庁「酒レポート 平成 27 年 3 月」

(<https://www.nta.go.jp/shiraberu/senmonjoho/sake/shiori-gaikyo/shiori/2015/pdf/000.pdf> : 最終情報確認日 2015 年 9 月 14 日)

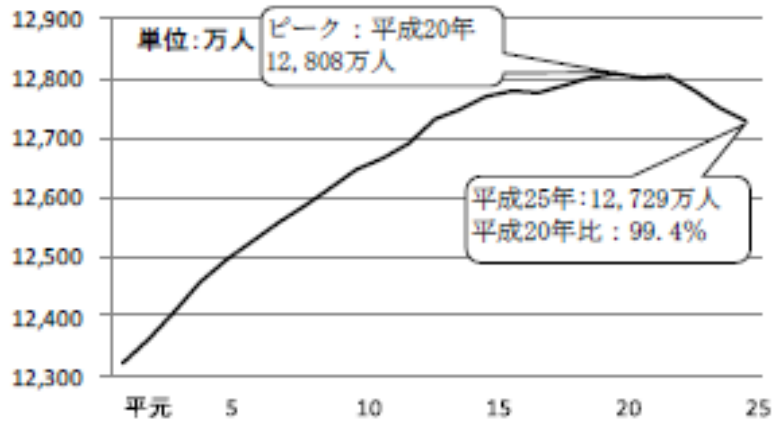
<sup>3</sup> 酒は緊張をほぐしたり気分を良くしたりするので、適度に飲む酒は薬にも勝るということ。

<sup>4</sup> 以前と比べて酒を飲まなくなった、飲む量が減った、酒を飲む機会が減った、という傾向を表現する言い方。社会的な傾向として「若者の酒離れ」などのように言うこともある。特にビール業界の売上げ減少に関連して言及されることもある。

飲酒日1日あたり1合以上を飲酒することである。

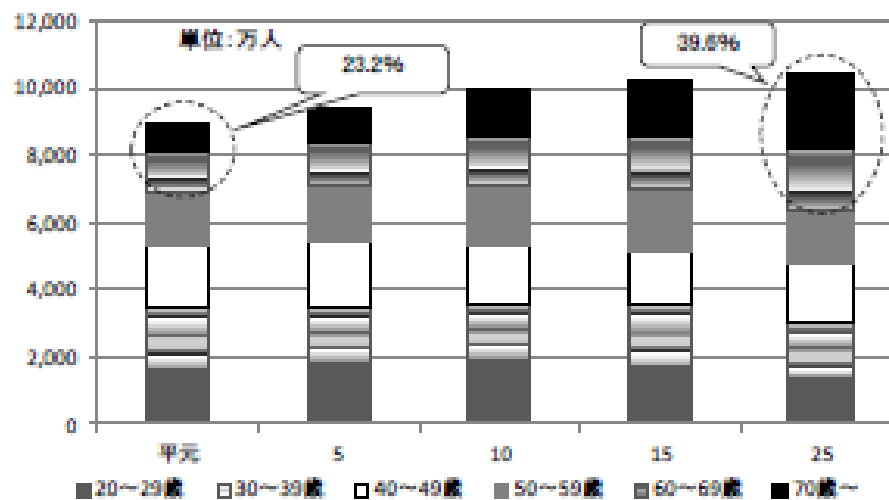
このアンケートによると週に3~4回以上飲酒をする者は17.3%であり、全体の2割にも満たず(図4参照)、実際に飲酒習慣のある人がいかに少ないかが分析できる(図4参照)。

(図1) 人口の推移



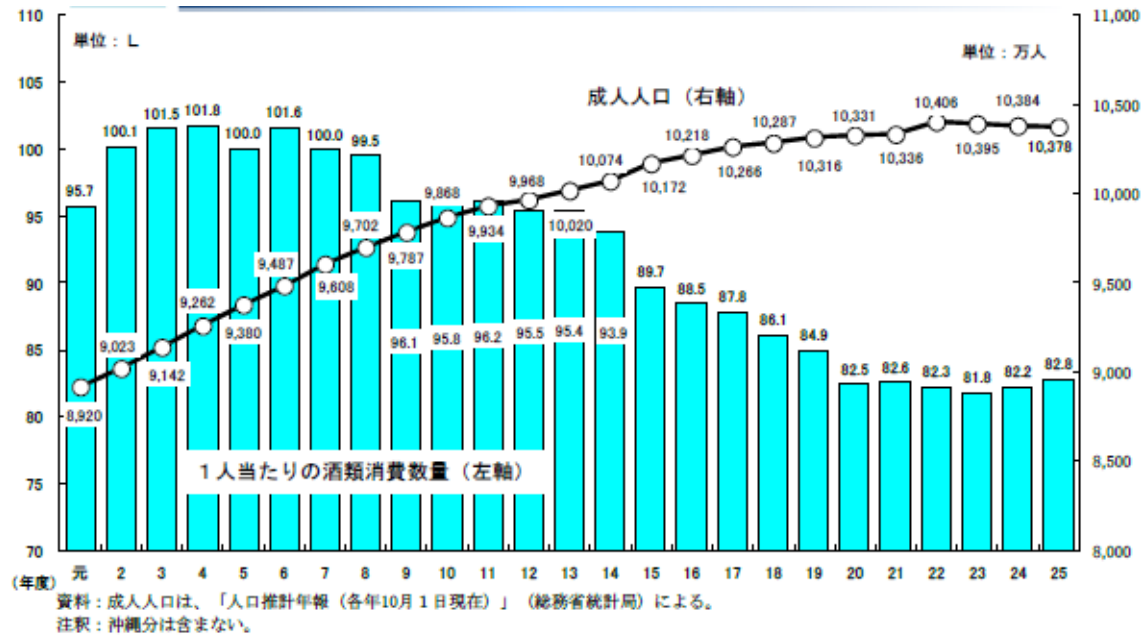
資料：統計局人口推計（長期時系列データ・各年次）

(図2) 成人人口の推移（年齢層別）



資料：統計局人口推計（長期時系列データ・各年次）

( 図 3 ) 成人 1 人当たりの酒類消費数量の推移



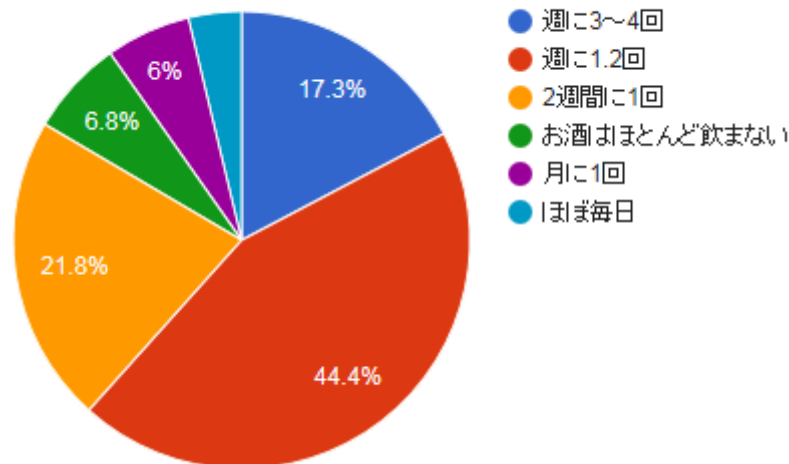
( 図 1 ~ 3 )

出典：国税庁「酒レポート 平成 27 年 3 月」  
<https://www.nta.go.jp/shiraberu/senmonjoho/sake/shiori-gaikyo/shiori/2015/pdf/000.pdf> : 最終情報確認日：2015 年 9 月 14 日)

( 図 4 ) 飲酒頻度についてのアンケート



### お酒を飲む頻度は次のうちどれに当てはまりますか？



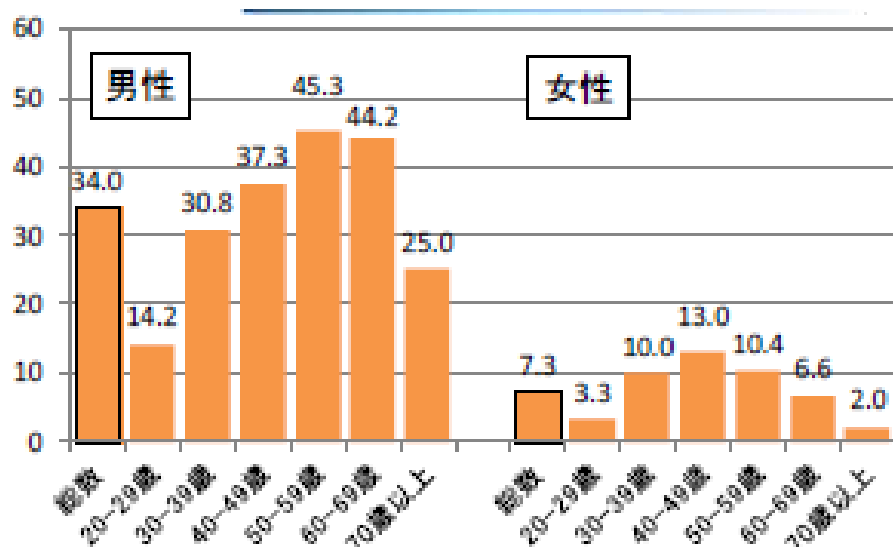
出典：独自のアンケートによるもの。アンケートの形式は上記で説明。

## 第2節 若者の〇〇離れの増加

厚生労働省の調査によると、飲酒習慣のある者は、男性が50～59歳、女性が40～49歳が一番多く、男女共に20～29歳の割合が圧倒的に少ないという結果が出ている（図5参照）。このように、年齢が若くなるごとに飲酒習慣のある者が減少していることから、前節で述べた酒離れのなかでも特に若者の酒離れが進んでいることが分かる。背景としては、かつてが酒の味を覚える前に半ば強制的に飲まされているうちに酒に慣れ、習慣的に飲むようになっていたのに対し、現在は飲みたくない人には強要しなくなってきており、酒の強要は一般的にも良いことではないという認識が強い、ということが考えられる。また、企業も若者向けの商品として、ソフトドリンクのように甘いカクテルやサワーを続々と発売している。甘いお酒で慣れてしまった若者は本来の酒の味を覚えないうちに酒から離れてしまい、居酒屋よりカフェなどに行くようになり、近年ではカフェ巡り<sup>5</sup>ブームなども起きている。

(図5) 飲酒習慣のある者の割合(性・年齢階級別)

<sup>5</sup> 何軒かのカフェを巡ること。



資料：平成24年国民健康・栄養調査報告（厚生労働省）  
第41表を再編加工

出典：国税庁「酒レポート 平成27年3月」

([https://www.nta.go.jp/shiraberu/senmonjoho/sake/shiori-](https://www.nta.go.jp/shiraberu/senmonjoho/sake/shiori-gaikyo/shiori/2015/pdf/000.pdf)

[gaikyo/shiori/2015/pdf/000.pdf](https://www.nta.go.jp/shiraberu/senmonjoho/sake/shiori-gaikyo/shiori/2015/pdf/000.pdf)：最終情報確認日：2015年9月14日)

さらに、若者の間では酒離れだけでなく、様々な〇〇離れが進んでいる。例としては渋滞やガソリンの高騰による車離れ、車を持たなくなったことに起因する旅離れ、将来的な身体的影響を懸念するようになったことによるタバコ離れ、携帯電話の普及による一人暮らしの際の固定電話離れなどが挙げられる。また、パソコンやスマホが普及したことは、多様な影響をもたらしている。SNS やチャット<sup>6</sup>によるコミュニケーションが一般的になったことや、インターネット上で買い物ができるようになったことで、外出をする機会が少なくなっても連絡をとることが可能になり、実際に会うような直接的なコミュニケーションが薄れてきた。

次章からは、これらの〇〇離れの要因を日本人の内面的・外面的変化という視点から考察していく。

## 第2章 酒離れの要因

### 第1節 飲酒環境における悪循環

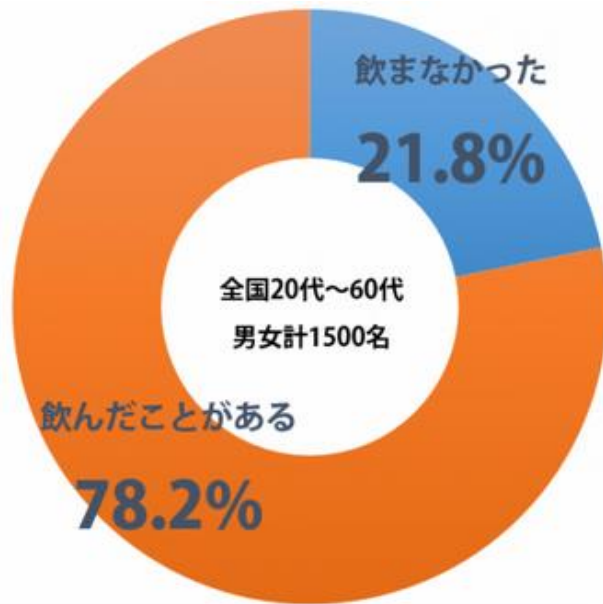
前述の通り、現代の若者において酒離れの傾向がみられる。その上酒席では、特に若者

<sup>6</sup> インターネット上で行われるリアルタイムコミュニケーションのこと。インターネット上において複数人でゲームをする際のチャットをとくにゲームチャットという。

の飲酒によるトラブルが後を絶たない。飲酒に関して我が国の法律を守っている人の数は決して多くはない。20～60代の男女 1500人を対象にしたインターネットリサーチによると、20歳になるまで一度もお酒を飲んだことがない人の割合は21.8%にとどまる<sup>7</sup>。つまり、78.2%は20歳になるまで一滴もお酒を口にした経験があるのである(図6参照)。

さらに世代間で顕著な差が生まれていることが、男性の世代別の結果についてのグラフを見るとわかる。男性の20歳までの飲酒経験の有無は、50代が20代の約3倍となっている(図7参照)。

(図6)20歳になるまで、酒は一滴も飲まなかった人の割合

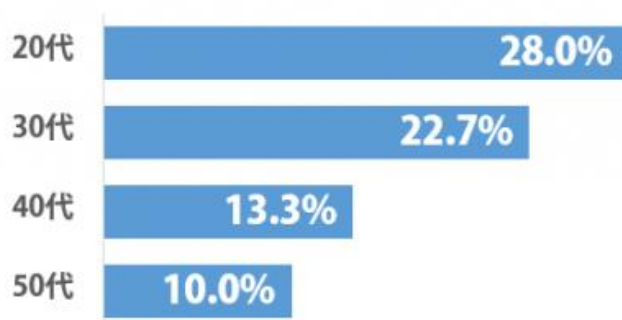


(図7)20歳になるまで、酒は一滴も飲まなかった男性の割合

<sup>7</sup> しらべえ編集部「なぜ現役大学生が酒を飲まないか判明！『飲むかはその場で決める』

『居酒屋よりカフェでしょ』(インターネットリサーチ「Qzoo」)

(<http://sirabee.com/2015/01/23/15443/> : 最終情報確認日 : 2015年9月27日)



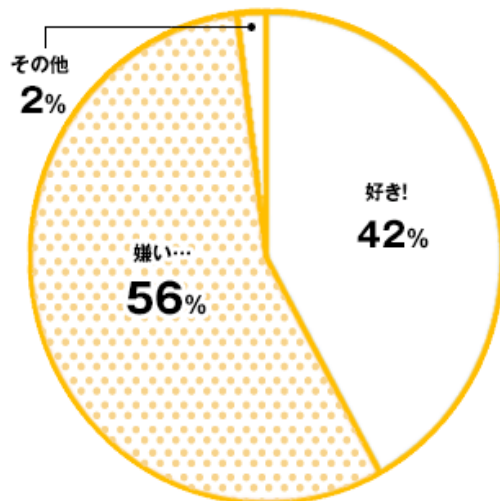
(図6~7)

出典: しらべえ編集部「なぜ現役大学生が酒を飲まないか判明! 『飲むかはその場で決める』『居酒屋よりカフェでしょ』(インターネットリサーチ「Qzoo」)

(<http://sirabee.com/2015/01/23/15443/> : 最終情報確認日 : 2015年9月27日)

もちろん法的に許されることではないが、大学生になると未成年でも酒を飲む機会を持つものが多い。しかし、近年では飲酒による事件、犯罪などトラブルが多発したため、飲み会に対して悪い固定概念が若者に根付いてしまった。飲み会に参加しない若者はかなり多く、そもそも参加するのが嫌いという方が多いようである(図8参照)。

(図8) 会社の飲み会に関する意識調査



出典: 第一三共ヘルスケア「会社の飲み会(20代対象) 2013年3月」

(<http://www.daiichisankyo-hc.co.jp/ryman-complex/man/03.html> : 最終情報確認日 2015年9月15日)

このように、56%の人、つまり実に2人に1人以上の若者が「会社の飲み会が嫌い」と答えている。この調査によると<sup>8</sup>、「お金を払ってまで職場の人間と一緒にいたくはない（研究開発 27歳）」「仕事が終わったら家で休みたい。飲み会なんて疲れる（庶務 25歳）」と、プライベートの時間を大切にしたいと考え、会社の飲み会が不毛だと感じる人が多い。

逆に「会社の飲み会が好き」と答えた若者は、「私の部署では仕事中は滅多に世間話をしないが、飲み会の場であればそういう話が気軽にできるから好き（メーカー 27歳）」「飲み会でしか取れないコミュニケーションがある（メーカー 25歳）」など、彼らの場合は「飲み会コミュニケーション」の利点をうまく活用していることがうかがえる。上記のアンケート結果からも「若者の飲み会離れ」は進んでいるといえるだろう。

かつての日本社会ではその善悪はおいておいて、上司や先輩から飲みの誘いがあったら自分の約束をキャンセルしてでも参加することも多かった。その際、個人の人権が保護されるべきであるから、酒席の機会減少と酒席への欠席の意志が尊重されるようになった結果、飲み会へ行く回数は従来よりも激減したと考えられよう。このように、現代の飲酒環境に対する内面的な「悪循環」の傾向が主に若者に見られる。

ではなぜ上司は部下を飲み会に誘わなくなってしまったのか。それは、飲み会への参加を強要することがハラスメントに繋がることを恐れているためである。このハラスメントがもたらす内面的変化について次節で述べることにする。

## 第2節 ハラスメント<sup>9</sup>の増加と現代人の内面変化

現日本社会においてハラスメントに関する「パワハラ<sup>10</sup>」「セクハラ<sup>11</sup>」「エイハラ<sup>12</sup>」「アルハラ<sup>13</sup>」「オワハラ<sup>14</sup>」などの造語が年々増すなかで、決まってそのすべてに共通す

---

<sup>8</sup> 第一三共ヘルスケア「会社の飲み会(20代対象) 2013年3月」

(<http://www.daiichisankyo-hc.co.jp/ryman-complex/man/03.html> : 最終情報確認日

2015年9月15日)

<sup>9</sup> 特定、不特定多数を問わず相手に対し、意図的に不快にさせることや、実質的な損害を与えるなど強く嫌がられるまた道徳のない行為一般的総称。

<sup>10</sup> パワーハラスメントの略。職場の権力(パワー)を利用した嫌がらせのこと。

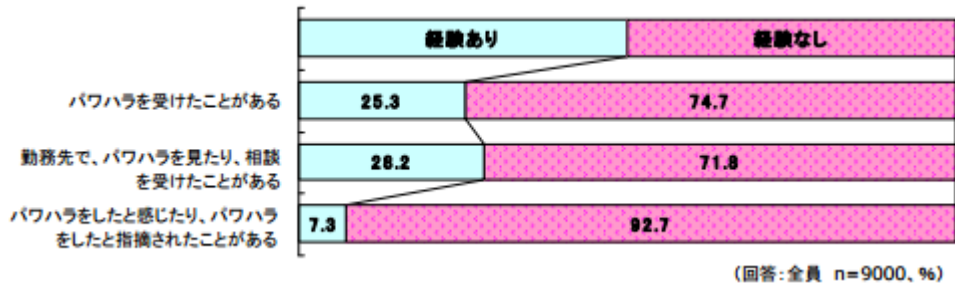
<sup>11</sup> セクシャルハラスメントの略。性的嫌がらせのこと。

<sup>12</sup> エイジハラスメントの略。年齢による偏見や嫌がらせのこと。

<sup>13</sup> アルコールハラスメントの略。アルコール飲料に関する迷惑行為、又はその場においての嫌がらせのこと。

るのが「相手(被害者)に迷惑をかける」「相手(被害者)が自分の意には反し不快にさせられる」などの悪循環を招くことである。そんなハラスメントという言葉が今大きな関心事になり始めている。以前までであれば、問題にならなかったような些細な出来事が職場や学校などの生活関係のトラブルへと発展し、人間関係への悩みが病にまで発展することで、労働管理上や私生活においても無視できない状態にまでなっている(図9参照)。

(図9) 過去3年間のパワハラについての経験



「アルハラ」は、個人の意思の有無に関わらず強制的に酒を飲ませることなどで、急性アルコール中毒搬送者が年々増加していることで問題視されている。<sup>15</sup>代表的な「飲酒の強要」の他に、「イッキ飲ませ」「酔いつぶし」「飲めない人への配慮を欠くこと」「酔ってからむこと」など、お酒の席での嫌がらせや、迷惑行為は多発している。平成16年に発表された研究<sup>16</sup>によると、飲酒に関係した何らかの迷惑行為の被害を受けた人の割合は、男性の31.3%、女性の26.3%、合計で28.7%であった。さらには“酒の上でのことだから”といった言い訳で繰り返される悪ふざけや絡みによって発展し、“セクハラ”にも繋がりがねない。古来よりコミュニケーションツールとして利用されてきた酒だが、もちろん節度は守らなければならない。

清水新二氏<sup>17</sup>は「日本では酒を飲まない(not drink)は飲むことができない(unable to drink)と同様に扱われ、『酒も飲めない奴』とか、時に『つきあいの悪い奴』といった悪評さえおしつけられてしまう。」と述べている。このように日本人は酒が飲めることが、酒が飲めないことより優れているとみなされる為、日本の飲酒文化はアルハラを生みやす

と。

<sup>14</sup> 就活終われハラスメント 企業人事などが学生に対して、内定を出す代わりに就活を終わることを強要する行為のこと。

<sup>15</sup> 東京消防庁「他人事ではない『急性アルコール中毒』」

(<http://www.tfd.metro.tokyo.jp/lfe/kyuu-adv/201312/chudoku/> : 最終情報確認日 : 2015年9月27日)

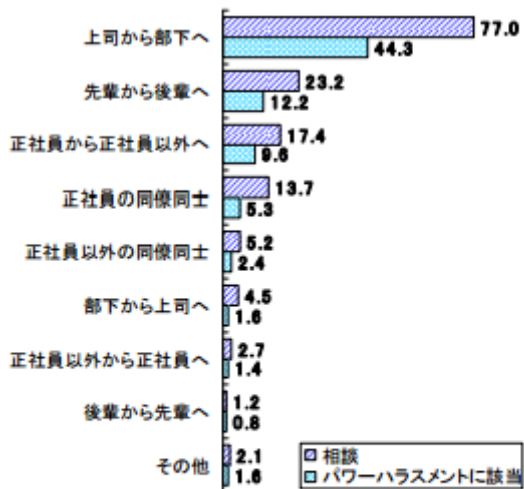
<sup>16</sup> 厚生労働省厚生労働科学研究費補助金がん予防等健康科学総合研究事業「成人の飲食実態と関連問題の予防に関する研究」

<sup>17</sup> 清水新二『アルコール関連問題の社会病理学的研究』2003年、ミネルヴァ書房、p.35-36

い文化であると言える。

さらに清水新二氏<sup>18</sup>は「飲酒の強要のみならず、『自分だけ酔わないのはずるい』とばかり、酔いの共有さえもが酒席で強要されることが少なくないのである。『飲んで酔わずにいることは“しらける”としてむしろ嫌われる』こともある。いつまでも酔わないでいると、『まだ酔っていない』と、さらに飲むこと強要されたりする。」とも述べている。特に、社会では上位者(先輩や上司)による下位者(後輩や部下)への集団的な強制が多くみられる。これはアルハラに限らず、パワハラでも多く見られる当事者関係である(図10)。

(図10) パワハラ相談の当事者関係



(回答：過去3年間にパワーハラスメントに関する相談があった企業 n=2083、%)

(図9～10)

出典：厚生労働省「平成24年度 職場のパワーハラスメントに関する実態調査報告書」

(<http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r9852000002qx6t-att/2r9852000002qx99.pdf> : 最終情報確認日：2015年9月27日)

強要される側は、飲み会に行きたくなくなり、ハラスメントが与える負の影響は大きくなってしまった現状は認めざるを得ない。一方、酒の強要を行う行為者は、場を盛り上げ、楽しませようといった気持ちから強要を行ってしまう。この行為者と強要される側の間の意識の差がハラスメントの問題を肥大化させているのである。成果主義に見られる能力至上主義の環境形成や、非正規社員の増加などの環境変化が人間関係に影響を与え、このようなコミュニケーションギャップが生み出されたと考えられる。

ハラスメントによる内的変化としては、とくに若者の価値観の多様化<sup>19</sup>が自己主張のし

<sup>18</sup>17と 同上

<sup>19</sup> 橋本泰子「現代日本における青年の価値観の様相」1997年3月

やすい環境の変化をもたらし、ストレス耐性の弱い若者を増加させたことが挙げられる。

このような関係性がある中で改善策を見出していく為には、歴史的視点から宴会の構造の変化などの外的要因を考える必要があり、この外的要因について次章で考察していく。

## 第3章 新たな飲酒環境の提言

### 第1節 宴会の二重構造

酒離れの外的要因を考えるうえで、宴会の二重構造が重要となるだろう。日本の宴会の特徴として一次会、二次会の構造という二重構造が挙げられる。

「場を変えて行われる宴会、つまり、『二次会』もつことがむしろ多い。この二次会は、平安朝時代の大饗<sup>20</sup>のなかにもみられる。それは第一次会を『宴座<sup>21</sup>』といい、第二次会を『穩座<sup>22</sup>』と称して行われていたという。[倉林 1962:118-138 参照]現代にこれをあてはめれば第一次会は公式の会社のもつ儀礼的な宴会であり、第二次会は会社の親しい仲間同士がもちあう寛ぎの宴会ということになる。いわば前者を『公の宴』、後者を『私の宴』と言ってもよいだろう[桜井・北見 1965:156-158 参照]」<sup>23</sup>

「倉林正次によると、宴座は『公宴座<sup>24</sup>』とも記されているように、これに参加する人びとが威儀をただす儀式ばった宴会であったのに対して、穩座は、こうした堅苦しさから解放された、くつろいだ雰囲気のみちた宴会であったという。そして二つの宴は、宴座から穩座の順に行われていた。現代風というと、宴座は一次会、穩座は二次会ということになるだろうが、宴座は一定の形式にしたがっておこなわれていたらしい。盃事<sup>25</sup>も三献<sup>26</sup>がきまりになっていて、大きな盃が上座から下座に渡った。また三献目には万歳楽<sup>27</sup>とか延喜楽<sup>28</sup>などといった舞楽がもよおされ、宴座の雰囲気を盛り上げた。これに対して穩座は、

<sup>20</sup> 平安時代、宮中または大臣家で正月に行った大がかりな宴会のこと。

<sup>21</sup> 宮中で節会・大饗などの時に、杯のやりとりの儀礼を行なった酒宴の座。宴の座。

<sup>22</sup> 節宴や大饗などの正式の宴のあとに設けられるくつろいだ席。穩の座。

<sup>23</sup> 伊藤幹治・渡辺欣雄 『宴』弘文堂、1975年 p5 より引用

<sup>24</sup> 宴座と同様。

<sup>25</sup> 盃をとりかわしそれによって約束をかためること。酒はもともとハレの飲みもので、神祭に際して醸され、ひとつ盃を大勢で飲みまわして神霊と人、人と人を結合させ、その結合を強化、確認するためのもの。

<sup>26</sup> 中世以降の酒宴の礼法。一献・二献・三献と酒肴の膳を三度変え、そのたびに大・中・小の杯で1杯ずつ繰り返し、9杯の酒をすすめるもの。式三献。

<sup>27</sup> 雅楽の曲名。唐楽、平調に属する。舞があり、4人または6人で舞う。唐時代において、賢王が国を治めるときに鳳凰という鳥が飛来して「賢王万歳」とさえざつたと伝えられるところから、鳥の声を音楽とし、飛ぶ姿を舞に作ったといわれる。

<sup>28</sup> 雅楽の舞曲。高麗楽の一。高麗壺越調の中曲。四人舞。延喜年間（901～923）の作といい、万歳楽の答



場所も寝殿や母屋から濡れ縁<sup>29</sup>に移され、主人も客も座順をくずして自由に着座した。ご馳走も折敷<sup>30</sup>(角盆)にのせ、盃事も三献という形式にこだわらなかった。管弦の遊びもおこなわれ、人びとは催馬楽<sup>31</sup>をうたい、雅楽<sup>32</sup>曲を口ずさんだという。」<sup>33</sup>

「現在、われわれがなじんでいる宴会は、本義からすると二重の構造を持っている。そのひとつは、直会<sup>34</sup>の儀である。つまり、礼講である。そしてもう一つは、饗宴<sup>35</sup>である。つまり、無礼講である。現在では、無礼講という言葉だけを一般に伝えているが、礼講があつての無礼講。無礼講が単独で催されることは、本来ありえないのである。そして本来、それは別々に行われていたはずである。もちろん連続性はあるが、たとえば席を変えて行われていた場合が多い。」<sup>36</sup>

「宴会--やまと言葉でいえば『うたげ』であるが、その性格を二種に分けておきたい。一種は制度のなかに組み込まれている公的な性格の宴である。もう一種は私的な性格の宴会である。日本では古くから格式を区別するのに書体の楷書(新書)、行書、草書になぞらえて、『真』、『行』、『草』と三つに分けるが、その最も正式で公的な真のスタイルの宴がある。それは公的行事であるから儀礼の一部であり、その形式はあまり変化しない。これに対して最も自由な草の宴は、真をくずしてそのつど趣向をこらし、どこか形式からの逸脱をねらっている。つまり宴会には、真の宴と草の宴という二つの性格のものがあり、私は、真の宴から草の宴へと時代を追って宴会の歴史を跡付けることにしたい。」<sup>37</sup>

つまり昔から一次会、いわゆる宴座、直会は寝殿や母屋で行われ、盃事や三献がきまっている儀礼的な宴会であった。これに対して二次会、いわゆる穩座、饗宴は濡れ縁で行われ、席次をくずし自由に着座する、盃事や三献にもこだわらない寛ぎの雰囲気漂う宴会であり、宴会は二重の構造を持っていた。

現在の宴会について考えると、一次会、二次会という二重構造を持ち、且つ、一次会で

---

舞としてめでたいときに舞う。花栄楽。

<sup>29</sup> 雨風を防ぐ雨戸などの外壁が無く、雨ざらしとなる縁側

<sup>30</sup> 食器を載せる食台の一種で、四角でその周囲に低い縁をつけたもの。

<sup>31</sup> 古代歌謡の一。平安時代、民謡を雅楽風に編曲したもの。笏拍子・和琴・笛・箏・笙・箏・琵琶などで伴奏した。

<sup>32</sup> 奈良時代に朝鮮や中国などから伝来した音楽、およびそれに伴う舞。また、それを模倣して日本で作られたもの。

<sup>33</sup> 伊藤幹治『宴と日本文化』中公新書、1984年、p74-75より引用

<sup>34</sup> 祭事が終わってのち、供え物の神酒(みき)・神饌(しんせん)を下げ酒食する宴。

<sup>35</sup> 客をもてなすための酒宴。

<sup>36</sup> 神崎宣武『酒の日本文化：知っておきたいお酒の話』角川学芸出版、2006年、p89より引用

<sup>37</sup> 端信行『宴会とパーティー 集いの日本文化』1995年、p108-109より引用

は席次が決まっている、お酌をする、乾杯の挨拶があるなど、儀礼的でフォーマルな宴会であり、二次会では親しい仲間内などの間で行われる一次会に比べるとフランクでインフォーマルな宴会であるという点で合致し、宴会の構造は平安朝時代からの特徴が受け継がれていると言えるだろう。

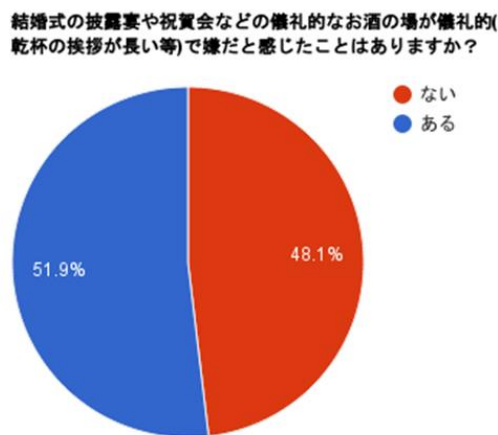
現在の一次会、二次会の具体的な例を挙げると、会社の上司との付き合いや、接待などの目上の人との宴会や結婚式の披露宴や祝賀会などの儀礼的な宴会が一次会、親しい仲間内との宴会が二次会である。

## 第2節 宴会に関する意識調査

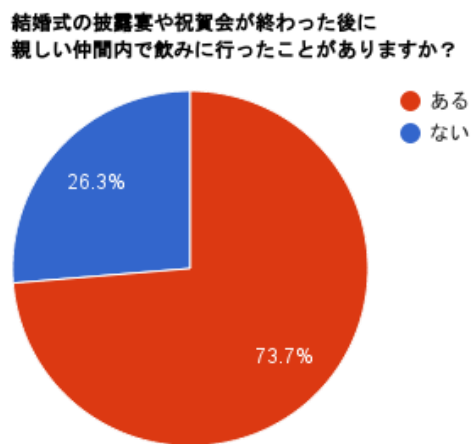
あるべき宴会の姿とはどのようなものであるのか。「行きたいと思える宴会」「楽しい宴会」とはどのようなものであるか。私たちは「一次会」「二次会」という日本の独特な宴会の二重構造に着目し、現代の日本では「一次会」のようなフォーマルな宴会は好まれず、「二次会」のようなフランクでインフォーマルな宴会が好まれているが、「一次会」のような儀礼的、フォーマルな宴会が苦手であるために宴会に足を運ぶことを嫌がるのではないかと仮説をたてた。

この仮説を実証するために、私たちは宴会に対する意識調査を行った。期間は2015年9月5日から2015年9月14日の10日間。調査対象は20歳以上の男女とし、街頭アンケートおよびSNSなどを活用して行った。10日間で男性104人、女性90人の合計194人から回答を得ることができた。

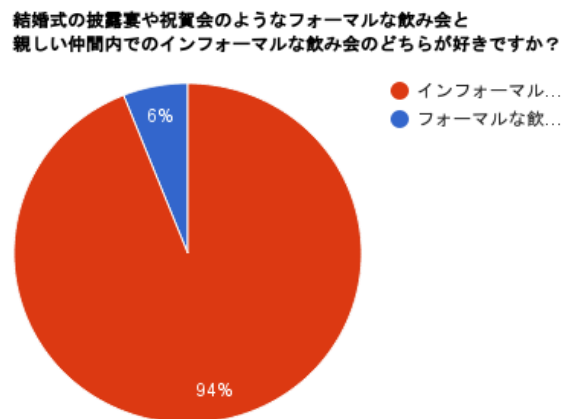
(図11)結婚式を例としたアンケート1



(図12)結婚式を例としたアンケート2

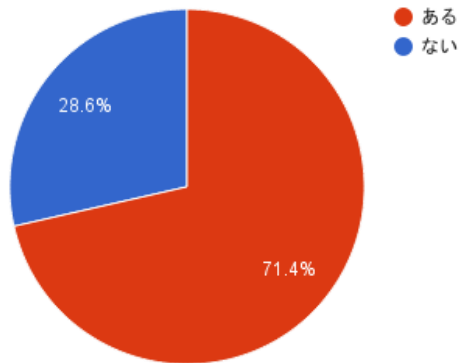


(図13)結婚式を例としたアンケート3



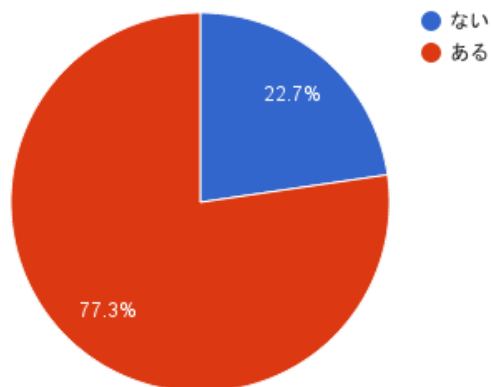
(図14)接待、上司との飲み会に関するアンケート1

接待や会社の上司との飲み会などの目上の人との飲み会に行きたくないと感じたことはありますか？



(図 15)接待、上司との飲み会に関するアンケート 2

行きたくないと感じたことがある方に質問です。  
実際に飲み会を断ったことはありますか？



( 図 11～15 ) 出典：独自のアンケートによるもの。アンケートの形式は上記で説明。

このアンケートでは結婚式の披露宴と接待や上司との飲み会を例として挙げた。ここでは結婚式の披露宴を「一次会」と、その後に行われる宴会を「二次会」と考えることを前提としている。

以上の結果が得られた。このアンケート結果から以下のことが読み取れる。結婚式を事例としたアンケートでは、結婚式の披露宴などにおいて、「乾杯の挨拶が長い」「かしこまった場であるため気を使う」等、儀礼的な部分を好まない人が 51.9%であり(図 11 参

照)、その後親しい仲間内で飲みに行ったことがある人は73.7%であった(図12参照)。また、結婚式の披露宴のようなフォーマルな宴会よりも親しい仲間内で行われるインフォーマルな宴会を好む人は94%であった(図13参照)。

接待や上司との飲み会を事例としたアンケートでは、接待や上司といった目上の人との飲み会に行きたくないと感じたことがある人が71.4%であった(図14参照)。行きたくないと感じたことがある人への理由を調査したところ、「気を遣う」、「酒の強要」という意見が半数を占めていた。そのほかの意見としては、「嫌いな人がいるから」、「本音が話せないから」等が挙げられた。また、行きたくないと感じたことがある人へ、実際に行きたくないと感じた飲み会を断ったことがあるか?というアンケートを行ったところ、77.3%の人が「はい」と答えた(図15参照)。

以上のアンケート結果から考察すると、「一次会」の儀礼的でフォーマルな部分を好む人の割合は少なく、また、一次会の後に、親しい仲間内で飲みに行く人が7割を越えていること、そしてフォーマルよりもインフォーマルな飲み会を好む人が多いという結果から、インフォーマルな二次会型飲み会を好む人が多いということは明白である。

前節で触れた通り、飲み会には多くの場合、フォーマルな一次会とインフォーマルな二次会とが存在する。すなわち、インフォーマルな飲み会を開催すれば従来よりも多くの人間が飲み会に参加するのではないかと考えられる。

「儀式は宴に先行し、厳粛な宴は開放的な宴に先行し、その逆は存在しない。」<sup>38</sup>

飲み会に限らず人が多く集まる任意の会というものは、多くの場合堅く厳粛な、すなわちフォーマルなものから始まり、時間の経過とともに段々とインフォーマルなものへと変化していくのである。最初からインフォーマルな飲み会というものの存在は非常に稀で、基本的に初めはフォーマルなものであることが定石である。

いわゆる一次会のようなフォーマルな飲み会は、前述したアンケート結果からも分かるように、酒の強要や雰囲気の高さ、目上の人への気遣いなどといったマイナス要素を多く含み、それゆえ人々はつまらない、行きたくないと思ふことを嫌がるのである。また、図15のアンケートからも分かるように、行きたくないと思ふ飲み会には行かない人、つまり意志に反することはやらないという環境が生まれていることも事実である。したがって、多くの場合一次会よりもフランクでインフォーマルな場である二次会にも足を運ばずに終わってしまう、すなわち宴会に行く機会が減少するという悪循環が起きていると考えられる。但し、人間関係や社会生活を円滑に送るためにはルールや慣習を大事にして守ることは当然ながら重要であり、儀礼的でフォーマルな部分に理解を持ちつつ大切にしていけるべきである。

以上のことから、フォーマルな部分の割合が非常に多い現代の飲み会形式から、一次会と二次会の隔たりがない飲み会形式にシフトしていくことも必要ではないかと考えられる。

<sup>38</sup> 酒井信彦「行事と酒の歴史的な考察」『生活文化史』3号、1984年、p34

## 第4章 総括

現在行われていて一般的な宴会を、儀礼的でフォーマルな一次会とフランクでインフォーマルな二次会の二重構造であるとして区別したが、日本文化における宴会では当初からそのような二重構造にあった訳ではない。

伊藤幹治氏<sup>39</sup>は宴会の起源について「『ウタゲ』という語が用いられたのは、意外に古い。八世紀のはじめに成立した民俗誌のなかに散見される。たとえば、七三三年に編纂された『出雲国風土記』<sup>40</sup>には、出雲の意宇の郡の忌部(現在、松江市忌部)にある温泉に、老若男女があつまって市をつくり、『燕楽』をしたということが記録されている。当時、温泉が万病に効くと考えられていたから、そこに各地から人びとが訪れ、彼らのあいだで、自然に物々交換する市が生まれたのであろう。ところで『ウタゲ』がおこなわれたのは、別に温泉が湧き出る土地にかぎられていたわけではなかった。泉のある場所とか磯や丘でも行われていたらしい。この泉は多いともよばれ、暑い夏が訪れると、男女が酒や肴をたずさえて、この泉にあつまり、酒を飲んでたのしんだ、と伝えられている。」としている。

古代の宴会の姿に鑑みると、本来の宴会は一次会と二次会のように区別するような二重構造にはこだわらざるべきでは無い。日本では古代から、人々が集まって酒を飲み交わしては歌い踊り、普段の日常的な生活とは異なる時間や空間で、非日常的な高揚した心の触れ合いを楽しんでいた。すなわち、このような「ウタゲ」が本来の宴会の姿であり、気軽に心から行きたいと思える宴会こそが非常に重要で、常に本音で言い合えるような親密度の高まりをつくり出すことが宴会の担う役割なのである。

本稿では日本における酒離れの現状から、その内面的・外面的な要因を考察し、アンケートからフォーマルな宴会が好まれていないことを立証してきた。形式を重視したフォーマルな宴会をするようになるうちに、人々が楽しむために宴会に集まるということが薄れてきたことがわかった。このことから日本人の酒離れの傾向を食い止めるためには、親密度の高い本来の宴会の姿を再認識することが必要であると結論づける。

---

<sup>39</sup> 伊藤幹治『宴と日本文化 比較民俗学のアプローチ』中央公論社、1984年、p2-3

<sup>40</sup> 元明天皇によって713年に編纂が命じられ、733年に完成し聖武天皇に奏上されたといわれている。出雲に伝わる神話などが記載され、現存の風土記の中で一番完本に近い。

### 参考文献（日本語論文）

- 石毛直道『論集 酒と飲酒の文化』平凡社、1998年、p429 - 449。  
佐々木武史「日本人と日系米国人との比較文化的研究 晩酌と宴会飲酒について」『アルコール研究と薬物依存』20巻1号、1985年、p40 - 49。  
樋口進『厚生労働省厚生労働科学研究費補助金がん予防等健康科学総合研究事業「成人の飲食実態と関連問題の予防に関する研究」平成15年度報告書』。  
橋本泰子「現代日本における青年の価値観の様相」1997年3月。

### 参考文献（日本語文）

- 神崎宣武『乾杯の文化史』ドメス出版、2007年。  
神崎宣武『三三九度 盃事の民俗誌』岩波現代文庫、2008年。  
神崎宣武『酒の日本文化：知っておきたいお酒の話』角川学芸出版、2006年。  
飯野亮一『居酒屋の誕生：江戸の呑みだおれ文化』筑摩書房、2014年。  
柴崎直人「今さら聞けない!?マナーと常識(第16回)接待・宴会でのマナー」『週刊教育資料』1280巻、2013年、p36。  
五百田達成「宴会がイヤなあなた、宴会がイヤな後輩を持つあなたへ 「業務として」の宴会の乗り切り方 (特集 ビジネスチャンスは酒席にある 宴会のストラテジー)」『日経プレミア plus』日経 plus3、2012年、p80 - 87。  
潮田丸男「男の歳時記 - 12 完 - 宴会好きか、嫌いか」『潮』296号、1983年、p162 - 164。  
小泉和子「宴会・もてなしの社会」『日本歴史』524号、1992年、p39 - 41。  
渡辺欣雄「序章 日本の宴会から世界の宴会へ」『アジア遊学』61号、2004年、p4 - 19。  
「繁盛店レポート つみき(寿司かつぼう店:栃木県小山市)-"飲み"から家族から宴会まで、地元のニーズを一手に引き受ける」『日経レストラン』1997年、225号、p46-51。  
「飲酒離れ 酒を飲まなくなった日本人」『日経ビジネス』2003年、p118-122。  
端信行『宴会とパーティー 集いの日本文化』1995年。  
伊藤幹治・渡辺欣雄『宴』弘文堂、1975年。  
中本新一『アルコール依社会—アダルト・チルドレン論を超えて』朱鷺書房、2004年。  
伊藤幹治『宴と日本文化』中公新書、1984年。  
武田邦彦『居酒屋力』双葉社、2014年。  
盛本昌広『贈答と宴会の中世』吉川弘文館、2008年。  
藤原銀次郎『宴会常道』三省堂、1925年。  
真崎敏弘『酒乱になる人、ならない人』新潮社、2003年。  
酒井信彦「行事と酒の歴史的な考察」『生活文化史』3号、1984年、p32-41。  
清水新二『アルコール関連問題の社会病理学的研究』2003年、ミネルヴァ書房。

### 参考 URL

国税庁「酒レポート 平成27年3月」  
(<https://www.nta.go.jp/shiraberu/senmonjoho/sake/shiori-gaikyo/shiori/2015/pdf/000.pdf> : 最終情報確認日 : 2015年9月14日)

しらべえ編集部『なぜ現役大学生が酒を飲まないか判明！「飲むかはその場で決める」

明治大学 商学部 第46回 奨学論文

「居酒屋よりカフェでしょ」(インターネットリサーチ「Qzoo」)

(<http://sirabee.com/2015/01/23/15443/> : 最終情報確認日 : 2015年9月27日)

第一三共ヘルスケア「会社の飲み会 2013年3月」

(<http://www.daiichisankyo-hc.co.jp/ryman-complex/man/03.html> : 最終情報確認日 : 2015年9月15日)

東京消防庁『他人事ではない「急性アルコール中毒」』

(<http://www.tfd.metro.tokyo.jp/lfe/kyuu-adv/201312/chudoku/> : 最終情報確認日 : 2015年9月27日)

厚生労働省「平成24年度 職場のパワーハラスメントに関する実態調査報告書」

(<http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r9852000002qx6t-att/2r9852000002qx99.pdf> : 最終情報確認日 : 2015年9月27日)